筑波学院大学紀要第12集　117 ～ 124 ページ　　2017年

＜研究ノート＞

市町村博物館と地域史研究

千葉　隆司*

Local History Study of Municipality Museum

Takashi CHIBA *

現代社会における持続的社会の形成に必要な要素として、筆者は地域コミュニティの再構築が重要と考えるが、それには地域史情報が大きな役割を果たすと考えている。地域史は、地域に展開した歴史であり、地域に生きた先人の地域を舞台とした情報であるために、現代の地域に生きる人々に団結力を与えると共に伝統的にあった相互扶助の精神をよみがえらせ、より良い地域社会の構築に大いに役立てられる重要な要素といえる。

小論では、地域史情報の重要性を考える筆者が実践している地域史研究とその情報発信の事例を紹介してみたいと思う。そして、地域史情報が地域コミュニティの再構築、さらに持続的社会の形成に大きな役割を果たせる可能性を秘めていることを改めて指摘してみたいと思う。

キーワード：市町村博物館、地域史研究　地域史の情報発信　高齢者による地域コミュニケーション

1．はじめに　持続的社会の再構築と地域史情報

筆者が博物館学芸員となった今から20年ほど前は、地域には地域の生き字引的な高齢者が必ずおり、地域史の調査の際に多くの情報が得られたことを覚えている。しかし、最近ではそうした高齢者はほぼ存在せず、地域史の情報を地域住民から得ることは困難になってきている。逆に調査する側の私に対して「若いのに良く知っているね」、「教えてほしい」などの声を聞くことが多くなっている。

最近耳にする「持続可能な社会の構築」とは、自然環境との共生を重視した社会の持続を示す内容が多くみられるが、それに加え筆者は地域社会のコミュニティの再構築も重要と考えている（千葉　2012）。地域には、相互扶助のシステムの中に引き継がれる地域史情報が多大にあり、その情報を共有することが地域コミュニティを持続させる重要な要素となるのである。地域の生き字引的な高齢者は、その地域史情報の伝達者として大きな役割を示すと共に、地域をまとめ上げる存在でもあった。

このような地域史情報の伝達システムが崩壊している昨今に、新たな仕組みを構築できる役割を担うことができるのが市町村博物館と考える。地域単位のあらゆる情報を調査・研究できる市町村博物館は、生き字引的な高齢者に代わり、失われつつある地域史情報を

＊　非常勤講師、Tsukuba Gakuin University

掘り起こし、伝承できる機関といえる。小論では、そうした地域社会の再構築の第一歩といえる市町村博物館での地域史情報の掘り起こし、そして地域住民への情報共有化という流れの具体例を紹介してみたいと思う。

2．地域史研究とその意義

2．1　地域史の伝承の衰退と新たな展開

夫婦別姓[1]の可否が議論され、一方で墓じまい[2]という行為が良く聞かれる今日、「名」や「イエ」に対する認識は、低下しているものとつくづく感じる。日本人は、先祖崇拝を生活する中に重要視し、自ずと「名」や「イエ」の歴史を記録したり、語り継が継いできたりして、地域に生きてきたのである。この「名」や「イエ」という認識や慣習は、全面的に正しいものと肯定することはできないが、それぞれの歴史をもつ住民が混在する地域で、各々の「名」や「イエ」の情報がコミュニティを通してさらに語り継がれ、地域史を構成するに重要な要素であり、それらが地域のまとまりや治安維持に大きく役立ってきたことは否定できない。年長者から語られる地域史は、地域を団結させ、相互扶助の精神を育成させているに十分であったのである。

列島史や一部の階層の歴史は、学校教育で学ぶことがシステム化している。しかし、地域史に関しては、一部の関心ある教員によって「総合的な学習」の時間や放課後の「社会科クラブ」等以外に学ぶ機会は少ないといえる。さらに地域の語り部がいなくなり、親でさえも地域に生きてきたものの地域史が引き継がれる場に遭遇しなかったために、次世代の子供たちに伝えることが困難になってきている。

先祖崇拝の崩壊の一途に加え、地域の成り立ちや地域の特性などを知らないで成長していく社会に郷土愛や誇りなどが生まれるはずもなく、故郷を意識した人生を歩むといった行動に出ることを単純に考えることは難しい。そうした中にも、地域史の大切さを知っていたり、改めて認識した方々による伝承システムが現代社会では新たに構築されようとしている。それは、市町村博物館の地域史研究による情報発信である[3]。

2．2　地域史研究の先覚者たち

先祖崇拝が基本となる我が国では、古を偲ぶという行為がいつの時代もみられていた。先人の多くは、そうした行為の中で調査記録を書き残しており、現代の我々に様々な地域史情報を伝えるものとなっている。列島規模での記紀・風土記編纂や徳川光圀から始まる『大日本史』編纂事業は大規模なものであるが、地域単位でも同様な事業は全国各地で行われていた。筑波地域出身の長島尉信は、郷土の古文書や城跡などの旧跡を踏査しながら郷土史研究を展開している。『小田事蹟』は、中世武将の小田氏研究の嚆矢となるもので、現在も重要な史料として扱われている。土浦の寺嶋誠斎やかすみがうらの服部保などは、地元に残る史料を丹念に調査しながら、郷土史研究に勤しんだ。両氏のまとめ上げた史料は、郷土の歴史を叙述するための有効な史料として現在も扱われている。こうした郷土史研究は、昭和に入り各種自治体史の編纂事業へと引き継がれる。自治体には、短期間で即席的に既存史料を基にまとめたものと時間をかけ再調査を実施し、資料編まで取りかかったものに大別できる。これら自治体史は、地域史を物語る基本資料となる。

地域の歴史を調べたい、明らかにしたい、後世に伝えたいという思いは、時代を超えた日本人に共通したものである。地域を知ることで自分が生まれ育つところに愛着や誇りを持つためのきっかけとなり、さらにその思いを発展させることで、他地域との比較分析が可能となる。こうした地域史からの発展行為は、グローバルな時代には必要不可欠な要素

で、日本人としてのアイデンティティを育むと共に他国を理解しようとする真の国際人としての日本人育成につながるものである。自分自身の文化を通しての特性を理解することで、他国の文化を理解することができ、尊重する精神も生まれてくるのである。

現代社会は、伝統ある日本文化を継承するための最終段階というべき時期にあるといえる。高度経済成長期以前に生まれた方々は、それ以前の実践される伝統的な慣習や生活様式で暮らしてきた方々を見たり、その様子を聞いたり時には実践したりしてきており、伝統的な日本文化について身をもって体感してきている世代である。この世代が、高齢者となっている現在、そのような日本文化を知らない次世代、さらに孫の世代に伝えられる最後の人材なのである。しかし、その高齢者が社会に埋もれてしまっており、世間に伝統ある日本文化を伝承する環境にない。学校等で日本文化の伝承を子供たちに学習させることも意義を感じるのであるが、もっと効果的なのは、身をもって伝統的日本文化を体験してきた高齢者によって次世代へ広めることである。

筆者は、こうした社会状況に鑑み、多くの高齢者に関心を寄せていただけそうな講座・教室を開き、人生の中に存在した伝統的な日本文化の重要性を再認識していただき、自らが伝承者として重要な存在であること、そうした高齢者の知識と経験を小学生をはじめとした子供たちに伝承する場を多く設けられるよう心がけ業務に携わっている。こうした状況に、改めて地域史を調査研究する方も現れてはじめている現状もある。

3　市町村博物館の地域史研究

3．1　かすみがうら市三ツ木地区の法源寺の事例

市町村博物館の中心的フィールドは、設置主体となっている自治体が対象とする範囲が一般的である。このフィールドは、博物館が市民と身近な関係になる、さらに情報収集や情報共有関係が形成できる程よい範囲といえる。筆者は、前にも述べたことがあるが、市町村博物館は、住民が気軽に立ち寄り、博物館と住民の互いの情報が交換できるようなサロン的存在となるように日々考えている。その結果、筆者が勤務する館には、多くの市民の方々が日頃から来館し、市民同士の交流等が図られるようになっている。

一昔前は、地域におけるコミュニティ要素が数多くあった。たとえば地域の行事、祭礼などの地域住民が共同で共通したものを行う環境があり、地域の同世代、異世代、全体が交わる中で、地域史が地域コミュニティの中で継承されるシステムが構築されていた。そのようなコミュニティが崩壊しつつある現在では、市町村博物館による地域史研究は、重要な業務であると言わざるを得ない。この市町村博物館の地域史研究は、地域住民との関係によって成り立っている。それは、広報誌やインターネットという見知らぬ地域住民との顔を合わさない中での関係ではなく、多くの地域住民と出会い、実際に応対する関係の中にあり、携帯電話やメールに代表される通信網によるバーチャル的な人脈ではなく、人と人、直接会話による関係のコミュニティシステムである。この関係こそが、深みのあるコミュニティとなり、直接資料の再認識、資料の新発見、さらなる地域史研究の進展を促すのである。その具体例を紹介してみよう。

筆者が実施したかすみがうら市郷土資料館主催の「三ツ木地区史跡学習会」の事前調査の際のことである。筆者は、20年以上の博物館勤務の中で市内各地において、この地区ならばこの方というような各地区になじみ郷土史家の方々と仲良くさせていただいている。三ツ木地区においても法源寺の檀家総代の方がおり、日頃より地域の話題を共有させてい

ただいている。このような関係者を各地に設けられ、常に連絡を取り合う関係になり得ることも、地域に根ざした博物館の信頼関係以外に何物でもない。本当にありがたいものであると共に、学芸員の冥利に尽きる。こうした関係を維持、発展させるためには、日々の調査研究成果を公表し共有し、地域貢献を目に見える状態にしていかねばならない。

「三ツ木地区史跡学習会」なる史跡学習会は、以前にも紹介した講座であるが、集落単位を巡る、いわば小規模な史跡巡りである。より歴史を身近に感じていただくためには、集落単位の歴史や文化を知っていただくことが効果的である。地域にある遺跡や文化財、寺社、石造物、巨木、景観などは各集落どこにでも存在し、それらが形成された経緯や自らのご先祖様が関わったかもしれない歴史を解説することによって多くの住民の方々、同じ自治体に居住する市民の方々には、身近な歴史に驚きと関心を寄せるもの間違いない状況となる。筆者は、ほぼ市内全域の集落単位での史跡学習会を終了させたが、現在も再度各地区で実施しており、たくさんの市民に地域史を伝えられているものと自負している。

講座当日に配布する資料は、自治体史[4)]などを既往の調査に基づく文献を頼りに作成することが多いのであるが、こうした基礎情報のみならず当然といえば当然なのであるが改めて現地調査することを筆者は重視している。現地調査ではまず、集落において必ずといっていいほど存在する寺社の調査から入る[5)]。地域の郷土史家や地域の代表者である区長の方に調査許可をいただき、内部を見せていただくのであるが、好奇心が高まる瞬間である。寺院には仏像・仏画・仏具など、神社には神事に使用する道具類、絵馬など、そして寺社共にある各種奉納物や古文書等などを見つけることができる。それぞれの資料の名称を確定し、大きさを計測するなど詳細な調査をする。そして時代や作者や奉納者といった人物名が銘文として残されていないか細部観察していくのである。この時に、即座に判断できる範囲で各種資料の内容について、所蔵者や管理者の方々に報告させていただき、関心をよせていただけるよう心がけている。

この時の調査対象地であった三ツ木地区[6)]は、中世は南之庄という領域に属し、主に筑波地方に拠点をもつ戦国武将の小田氏の領地であった。その後江戸時代を通じ、水戸藩領になる。『新編常陸国誌』によると「・・・元禄十五年ノ石高三百五十二石六斗一升一合ニテ、天保十三年ニハ、田畠三十町二反九畝二十三歩、分米二百六十九石三斗一合トナル《吉田明神》神體幣〔正八幡ヲ潰シ、吉田ニ改ム〕、社領一石七斗六升一合、《法源寺》」とある。三ツ木地区は、一級河川菱木川の左岸台地状に位置し、この一ノ瀬川流域の沖積低地や付近に形成される樹枝状小支谷が稲作に使用される土地であった。地元に伝わる宝暦13年（1763）「三ツ木村人別帳」によると「惣人数〆百四人　内男六拾壱人　女四拾参人　家数〆弐拾五軒　内午より未に壱軒過　馬数〆拾三匹」とあり、当時の住民の人数や家数などが分かる。

三ツ木地区には、法源寺という曹洞宗寺院がある。現在は、常住する住職はなく、隣接する宍倉地区の杲泰寺（曹洞宗）の管理下にある。自治体史やその他の自治体刊行物にも詳細な情報は記されていない寺院である。法源寺は、『開基帳』によると「元々は臨済宗寺院で、弘長２年（1262）に仏国禅師によって開山され、四代から曹洞宗になる」と記されている。ここに登場する仏国禅師は、鎌倉時代後期の臨済宗の僧である高峰顕日の諡号で、鎌倉幕府執権の北条氏の帰依を受けるなど、鎌倉にある主要な臨済宗寺院の住職を歴任している高僧である。敷地は、広さをもつが、ひっそりとしたたずまいで、境内には花崗岩製の古相を示す歴代住職墓地（写真４）

と共に小規模な本堂があり、このような法源寺に鎌倉幕府との関係を示す仏国禅師の開山とあることは驚くべき寺伝である。天保二年（1831）『三ツ木村神社仏閣調』によると「本尊阿弥陀如来　宍倉村杲泰寺末　上戸村長国寺閑居　一禅宗　法源寺本隆」とあり、「寺内鎮守　三か所　羽黒大権現　板宮　稲荷大明神　板宮　八龍権現」と境内には神社も祀られる環境であったことが分かる。本堂内にある仏像は、本尊の木造阿弥陀如来坐像（写真３）、もう一体の木造阿弥陀如来坐像、木造地蔵菩薩坐像が須弥壇に安置されている。これらの仏像は、いずれも近世の所産と想定できるものである。仏像がある部屋の隣には床の間がある部屋があり、ここに今までは知られていなかった一体の懸仏があった。懸仏は、神仏習合思想の中で形作られた仏教美術品である[7)]。この懸仏の詳細をみてみる。

直径30.6～30.8cm の鏡板（写真１）には、1.1～1.2cm の幅の覆輪が２重にみられ、内区と外区を区画している。覆輪の表面は、丸みを帯びているが縁は直角に折り曲げられている。外区の覆輪には、上部・下部・左右の十字位置（４箇所）に、３つ１セットの笠鋲（頭部の径0.9mm）を打ち、その間には２つ１セットの笠鋲（４箇所）を付ける。合計８箇所に笠鋲がみられる。外区が切れている箇所は、懸垂のための鐶座（おそらく獅噛座であろう）が取付けられていた位置と考えられる。内区の覆輪には、２箇所の葉状金具（横1.2cm、縦1.7cm で中央に鋲が打たれ固定される）がみられるが、鏡板には他に５箇所に穿たれた穴がみられ、合計７箇所の葉状金具があったものと思われる。

鏡板に付された尊像は、鋳銅製の薬師如来坐像で、尊像の左右に不正長方形の縦1.0～0.9cm×横0.6cm の穴が穿たれていることから、脇侍が取り付けられて三尊型式あるいは

写真１　銅造薬師如来懸仏（表面）

写真２　銅造薬師如来懸仏（裏面）

写真３　法源寺の本尊の木造阿弥陀如来坐像

写真４　法源寺の歴代住職墓地

華瓶があったと思われる。薬師如来像は、像高12cm、最大幅8.8cm、坐面下端には、何かが取付けられていたと考えられる径2mmの穴が台座木質部にまで貫通している。台座は幅11cm、高さ2.6cmを計り、杉材と思われる木質に三葉状飾り（銅製）を中心に37枚以上の蓮弁（銅製）が付されている。台座上部は、上面9mm、折り返して6mmの蓮弁と同素材の2mm間隔で格子状の刻みが施される板が貼られている。

続いて鏡板の裏面（写真２）であるが、杉材と思われる円板が一部遺存しているが、ほとんどは欠損している。表面で覆輪が付される部分には、鉄鋏で裁断されたと思われる幅2.5cmのドーナツ状円板に25.6cmの円板を6mmほど重ねて一枚の鏡板としている。笠鋲は、厚さ1mm、一辺6mmの方形の鉄板で受けられ、鏡板に固定される。尊像は、縦1.1cm、横0.8cmに穿たれた方形の穴に、尊像と同鋳の枘（0.9×1.1cmの方形の中央に2.5mmの穴が穿たれる）を出して固定される（現在は、針金で固定されるが、本来は鉄釘などであったと考えられる）。台座は、鏡板の裏面からＴ字形の釘を打ち、固定した後にＴ字形釘の先端を折り曲げ、完全に動かないようにしている。

法源寺の懸仏は、県内に同様な作風がないが、県外まで広く求めれば滋賀県多賀町の安養寺の銅造阿弥陀三尊像懸仏や同県同町の真如寺の銅造阿弥陀三尊像懸仏がある。滋賀県例の方が法源寺例より全体的に倍近い大きさを示すが、本像台座の造りが類似する。木質を核として蓮弁を貼り付け台座上面の縁にも銅板を巡らす作風が共通するものである。滋賀県例は、共に鎌倉時代の作例とされ、法源寺例もその頃の作例と考えられる。このような時代推定が可能であるとするならば、先の法源寺の開山伝承時期とほぼ合ってくるように思える。

３．２　法源寺の懸仏が物語る地域史

それでは、このようにして確認された法源寺の懸仏からどのような歴史がみえてくるであろうか。まず、筆者はこれまでの経験の中から２つの視点をもった。一つは懸仏が制作されたと考えられる13世紀後半と法源寺開山の時期とされる鎌倉時代の地域史、二つ目が江戸時代に神仏習合を嫌った水戸藩領の三ツ木村にあって懸仏が残された史実をもつ地域史である。

13世紀後半頃の三ツ木村は、南之庄と呼ばれる地域で、筑波に拠点をもつ小田氏の支配領域であった。当時の小田氏は、七代治久の時代で、治久は祖父の小田宗知の子である復庵宗己を猶子に迎え、正慶元年（1330）に高岡（土浦市高岡）の楊阜庵を与えた人物である。その後、楊阜庵は正受庵と改称され、文和三年（1354）に正受庵は大雄山法雲寺と号した。法雲寺は、常陸国における臨済禅の中心的道場となる。さらに、復庵宗己は小田氏一族の筑波氏に招かれ筑波山中に禅源寺を、また同族の上曽氏は竜門寺を、治久の跡を継いだ小田八代孝朝は崇源寺を開基するなど小田氏一族は臨済禅の普及と定着を進めていたことが分かる。復庵宗己には、弟子が2000人を超え、東北南部から関東に及ぶ多くの寺の開山に請じられること300に及んだとされる（桃崎　1997）。また、小田八代孝朝は、佐竹十代義篤の娘を妻として迎えるが、義篤の異母兄である月山周枢は、夢窓疎石の弟子となった人物で、義篤も臨済宗に厚い信仰を寄せていた。当然、孝朝も父治久、義父義篤の影響下で、臨済宗の高僧との交流を深めていったのであった。この時期の小田氏と佐竹氏との縁戚関係の構築は、相互に臨済禅の信仰を発展させるには十分な環境であった。

法源寺の懸仏は、開山時期からまもなく制作されたものと考えられ、特定の本尊をもたない臨済寺院ならではの薬師如来像と思われる。薬師如来は、現世利益の仏として代表さ

れるが、古代に天台系浄土思想が常陸平氏一族によって広く普及した当地においては、最も身近な仏であった。臨済宗として始まった法源寺の歴史において、安置される仏像は薬師如来の懸仏、江戸時代の古文書にみる本尊阿弥陀如来、さらに現在も須弥壇に安置される阿弥陀如来、地蔵菩薩などへ信仰が発展していったと考えられる。

このようして新たに解明された地域史を平成28年８月５日に三ツ木地区法源寺において実施された施餓鬼供養の場にて紹介してみた。そこに集まった檀家や地域住民約100名の方々に、市町村博物館の地域を対象にした調査研究の成果を伝えられたのである。参加した方々は、真剣な表情で聞き入り、ためになったとのお言葉を得ることができた。このような事柄が持続的な社会を構成するに大きな役割を果たすことができているのである。

４．おわりに

もう一方の懸仏から考えられる地域史であるが、江戸時代の水戸藩領三ツ木村では、『三ツ木村神社仏閣調』に「是は先年正八幡宮に御届候処元禄十一未年御潰し　吉田大明神　鎮守御願請御勧請仕候」とあるように元禄11年に徳川光圀の命によって、当地域の八幡神社が吉田神社に改められていった。その時の別当は法源寺であった。現在も小字八幡の場所に吉田神社が鎮座しており、地区の鎮守として信仰されている。祭神は日本武尊であり、配祀として誉田別命、倉稲魂命、菅原道真公が祀られている。神社名は変更されたが、本来の祭神である誉田別命は配祀として残されたようである。この神社の廃止と変更には、別当であった法源寺の僧侶たちも困惑したことであろう。そして八幡神社の社殿内や別当寺院である法源寺にある神仏習合色の強いものに対し、処分や配置替えなどの命も出されたと思われるが、懸仏は現在まで残されたのである。結局、僧侶や村人の熱意で、従来から村内で信仰され続けてきた地域の神仏を完全に排除することができなかったものと考えられる。吉田俊純氏が指摘するように同じく水戸藩領の上伊勢畑村（常陸大宮市）の事例でも寺社整理を徹底させることは難しかったようであり（吉田　1995)、筆者もこの上伊勢畑村と密接な関係にあった檜山村の鬼渡神社の懸仏が取り払われたと見せかけて別な場所（鍋蓋観音）に安置され、信仰され続けてきたことを紹介したことがある（千葉　2003)。先祖から引き継がれる庶民の信仰は、領主の命令といえども簡単に終了させることなどできない訳で、解決策へ導けない様々な困苦に対し、心の拠り所として存在し続け、実際のところ地域に展開した信仰及び信仰に伴う偶像等を排除する命令に、密かな抵抗があったのである。

今回紹介した三ツ木村の薬師如来懸仏も地域に生きた村人たちの先祖伝来の信仰の一端を物語る重要な歴史資料となる。１点の神仏習合遺物であるが、制作された時代と三ツ木村の歴史の２つの視点からのアプローチで推定を含めた歴史的考察が可能となった。

このような地域史資料の発見とその調査研究が積み重なり、地方史、列島史といったように広範囲な歴史解明につながっていくのである。市町村博物館は、地に根ざした活動を展開しているので、歴史研究の最前線にいるのである。そこには、学芸員のみの活動ではなく、学芸員を信頼し支援、協力する市民の姿がある。市民に愛され、市民との協働の中に市町村博物館はあるのである。このような関係があるからこそ、小規模でありながらも重要な教育施設として存在し続けられるものと考えている。

地域の歴史は、そこに住む方々に愛着と誇り、勇気と希望を与える大切な情報である。今後も地域に生きる人々の生活によりよい影響を与えられる事業を市町村博物館を通じ発

信し続けていきたいと思う。

註釈

1) 夫婦別姓の議論については、歴史的に別姓がどのように使用されてきたかということよりも、別姓は日本人の名「名」や「イエ」の考え方の延長で法令に明文化されただけのことで、本質はこれからの家族をどのように捉えるかであると思う。

2) 墓じまいは、文字通り墓を終う、つまり墓の維持管理を終了するということである。筆者が、この様子を聞いた寺院の住職は、「墓じまいを依頼する方は、当家の家族や親戚筋の方ではなく施設の方なのですよ」と話してくれたことに衝撃を覚えている。日本人として大切にしてきたものを一つ一つなくしていく現代社会の一端を垣間見た瞬間であった。

3) 住民のほとんどが博物館は、生活には関係がないもの、一部の関心がある方が利用するものと思っているようである。そのような住民に博物館の存在理念や事業・活動の目的・目標を理解していただき、協働しようとする動きは各地にみられるが、並々ならぬ努力と実践が大切となる。

4) 歴史叙述は、それまでの研究成果に基づき、研究者の個別な見解や考察で示される。新資料や科学的分析などによって覆されることもあるが、それらは積み重ねられた学史となり、数多くの研究成果によって真実に迫れる歴史叙述へつながっていくのである。自治体史もそうした歴史研究の通過点の一つである。

5) 住職や神官が常住する寺社の場合には、それらの方々がすべての資料について把握、管理しているため研究者との交流の中で新情報を見いだすことは少ないのであるが、地域の方々で管理される寺社については新発見資料が存在する可能性が高い。自治体史や郷土の資料集を作成して終了と考えがちな地域史研究であるが、地道かつ継続的な調査研究が多くの成果を招くものとなる。

6) 三ツ木地区は、江戸時代には水戸藩領三ツ木村であった。元禄期に水戸藩の宗教改革により村内の八幡社は、吉田社に改められている。神仏習合の宗教環境が一般的であった村落において信仰する神仏の明確な線引きが行われたのであった。懸仏は、その多くがこの際に処分されたようであるが、法源寺の懸仏は難を逃れ現在に伝えられた貴重な資料と言える。

7) 茨城県内に残る懸仏は、筆者が以前にまとめた『茨城の鏡像と懸仏』の30体、その後飛田英世氏にご教示いただいた鹿嶋市の１体、筆者が確認したかすみがうら市下軽部の鹿島神社に安置される鏡板のみの懸仏、そして法源寺の例を含め、現在では33例となった。

参考文献

服部　保編　1961 『郷土史料集』9・10合巻　出島村教育委員会

出島村　　1971 『出島村史』

土浦市　　1975 『土浦市史』

筑波町　　1989 『筑波町史』

吉田俊純　1995 「寺社整理と村落」『地方史研究』第253号　地方史研究協議会

山下　立　1997 『懸仏の世界―神仏習合の歴史と造形―』滋賀県立琵琶湖文化館

桃崎祐輔　1997 「エピローグ　中世社会の変質」『中世の霞ヶ浦と律宗―よみがえる仏教文化の聖地―』土浦市立博物館

千葉隆司　2003 「茨城の鏡像と懸仏―中世宗教空間の復原―」『茨城県史研究』87　茨城県立歴史館

千葉隆司　2006 「信じられる世の中へ」『茨城教育』第825号　社団法人茨城県教育会

千葉隆司　2012 「市町村博物館の時代―真の日本人と地域コミュニティ再生への重要拠点―」『筑波学院大学紀要』第７集　筑波学院大学

千葉隆司　2016 「市町村博物館と高齢者」『筑波学院大学紀要』第11集　筑波学院大学

中山信名修　栗田寛補　1976『新編常陸国誌』崙書房